

教材から見るラジオ英語講座創始者の足跡

袖川裕美

序

NHK（日本放送協会）の前身である東京放送局¹⁾が開局されて間もない1925年（大正14年）7月20日、本局の置かれた愛宕山から最初のラジオ英語講座が放送された。初代講師は英語学者の岡倉由三郎である。以降、ラジオ英語講座は1941年（昭和16年）12月8日の真珠湾攻撃の朝まで放送され続けた。

その後、太平洋戦中の4年間の中断はあるものの、敗戦からわずか1か月で再開。現在に至る。

この事実——特に戦前にラジオ英語講座が開設されていたこと——は、これまで「読み書き」が中心で「聞く、話す」は重視されてこなかったと言われる日本の英語教育に、異なる一面があったことを示す。

本稿は、戦前・戦後の放送英語講座の果たした役割について論ずる長期的な研究を目指すなかで、まず黎明期のラジオ英語講座がどのようなものだったかを、初代講師の岡倉由三郎の教材に焦点を当てて考察したい。

1. 略歴

岡倉由三郎（1868-1936）は福井藩の出身で、家業は生糸業を営んでいた。開国が迫るなか、岡倉家は横浜に転居し、生糸貿易に従事。横浜という環境に加え、先見の明のあった父親の教育方針により、幼い頃から英語に親しみ、かつ漢学塾や和漢塾にも通った。6歳上の兄の覚三（岡倉天心）が英学塾に通うときも、ばあやに背負われて同行したという。由三郎は日本美術界の発展に尽力した岡倉天心の弟であることから、由三郎を語るとき、必ず枕詞のように「岡倉天心の実弟」という説明がつく。由三郎の多大なる業績を考えると、フェアではないように思われるが、由三郎自身、常に「兄にあやかりたい」と話していたという。いずれにしる岡倉兄弟は英語

に堪能であった。

岡倉由三郎は1887年(明治20年)東京帝国大学の選科で博言学(現在の言語学)を学び、1891年から1893年(明治24-26年)まで朝鮮ソウル大学の日本語学校校長を務めた。1896年(明治29年)、東京高等師範学校の国語科・英語科担当講師として赴任。後に英語科主任教授に任じられた。また、自宅で洋々塾を開き、後進の育成にあたった。岡倉は1925年(大正14年)以後12年間にわたり、ほぼ連続してラジオ英語講座を担当したが、塾生たちも英語講座のテキストを準備したり、講師陣に加わったりしている。

著書は膨大で、英語教授法のバイブルとも言われる『英語教育』や研究社の『新英和大辞典』などが名高い。『新英和大辞典』は「英語の神様」といわれた岩崎民平に引き継がれ、今日なお大辞典といえはこの辞典との感がある。岡倉は1905年(明治38年)に3年間の欧州(特にイギリス)留学を終え、その後も1912年(明治44年)にアメリカへ講演。1931年(昭和6年)には、日本政府の美術使節としてアメリカで日本文化、特に日本美術について紹介講演をした。

2. 岡倉担当の番組

2.1. 英語講座の概要

英語講座は、開始された翌年(1926年/大正15年)に初等科と中等科に分かれ、英文学講座も短期的に開かれた。その後1930年(昭和5年)に英語会話速成講座、1931年(昭和6年)に受験講座英文解釈と受験講座和文英訳が開設されている。1933年(昭和8年)には英語講座初等科が基礎英語初等科となり、中等科が英語講座になる。さらに1935年(昭和10年)には英語会話講座が開かれ、これが1938年(昭和13年)には実用英語会話と名前を変えた。基本的には春期²⁾、秋期、冬期の3期開設で、夏期が加わることがあった。

このように発展拡大・細分化していくなかで、岡倉は主に、初学者向けの英語講座初等科(1926年/大正15年春開始)や基礎英語初等科(1933年/昭和8年春開始)、基礎英語講座(1934年/昭和9年春開始)を担当した。放送回数にも変化があるが、平均週3回、1回30分。放送開始時間は、初等科は18時半開始、基礎英語は午前6時半だった(春期と秋・冬期に

は5分の違いがある)。

テキストの定価は以下の通りである。1930年(昭和5年)英語講座初等科・冬期:20銭。1931年(昭和6年)英語講座初等科・秋期:20銭。1934年(昭和9年)基礎英語講座・秋期:30銭。1936年(昭和11年)英語会話講座・夏期:25銭。参考までに1935年(昭和10年)の鉄道初乗り料金は5銭だった。

2.2. 岡倉番組の特徴

では、岡倉はどのような講座を開いたのだろうか。岡倉が講師を務めた英語講座のテキストの一部が、愛宕山のNHK放送博物館に保存されていて、閲覧できる。また、1925年に放送された英語講座のごく一部(2分程度)を試聴することもできる。これらを精査し、いくつかの特徴があることが分かった。

2.2.1. 発音と音声

音声を聞いてみる。以下は転写したものである。なおNHKアーカイブスのホームページでも数十秒試聴できるが、内容は以下の「あるひとつの〜息子はいくたりお持ちですか」とほぼ重なる。

すべてに親切です。

My mother is a kind woman. 私の母は親切な婦人です。

She is as kind as my father. 母は私の父と同様に親切です。

kind, as kind as; tall, as tall as

私の叔父 my uncle; 私の叔母 my aunt;

私の甥 my nephew; 私の姪 my niece

Lesson 5, 1, 2, 3, 4, 5 (ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ)

Lesson 5, 課目 5

my father, a father; my mother, a mother; my uncle, an uncle;

my aunt, an aunt

「あるひとつの」を軽く指す言葉に an と a があって、ともに 1, 2, 3 の 1 と同じデ(?聞き取り困難)の言葉。アイウエオその他の母音の前には an を使い、その他の場合には a の方を使います。

an uncle, two uncles, an aunt, three aunts, a nephew, four nephews, a niece, five

nieces

ひとりの息子 a son ; 私の息子 my son ;

ひとりの娘 a daughter ; 私の娘 my daughter ;

How many sons have you? 息子はいくたりお持ちですか。

I have only one son. 私には息子はたったひとりあります。

How many daughters have you? 娘はいくたりお持ちですか。

I have only one daughter. 私には娘はたったひとりあります。

試聴して感嘆するのは、曖昧母音の a[a] の発音や daughter の au[ɔ] や語尾の -ter[tə] の発音の正確さである。録音は短くとも、折目正しい人柄を感じさせる語り口調とともに、岡倉の高い英語力、ひいては明治人の教養の高さを思わせるに十分である。

岡倉の語りについては、ユーモラスだったと書かれている文献が多いが、残念ながら上述の音源だけでは確認できない。ただ、岡倉自身、「語学放送随感³放送12年」(『放送』第6巻9号)で、容易そうに見える「ABCの手ほどきが、天下の一大難事業」であり、「Jの字は象のお鼻によく似てる」、「Wの発音を正確におしえる一つの方便として、熱湯を入れた湯呑み茶碗のなかの湯を、吹いてさます時の口形をして、そのまま「ウ」「ウー」と発音してごらんない」と説いたと述べている。また、「ある学校で、この発音練習の手段を取ったとき、熱湯の代りに冷水を用いたところ、生徒は、吹かずにゴクリとその水を吞んでしまった、これでは世にいう「ウのまねをする生徒、水のみ」ですよ」などと「おとし話」をしたとも書いている。

また、岡倉は「音波に声を乗せての教育」についての論考(「ラヂオと外国語の教授」『放送』第5巻1号)で、ラジオ英語講座の教授者を「マイク教授者」と呼び、学習者との個人的接触のない一方通行の作業であるゆえの注意点を書き記している。つづりと発音の違いを伝え、聞き手を唯一人と考えるようにと言い、「目の為の単語の切り分けではなく、耳の為の意味の単位をいつも学習の根本対象とすべきであると自分は信ずる」と書いている。これを裏付けるのが、文章全体につけた発音記号である。岡倉の講座テキストには、単語だけではなく、文章全体に発音記号がついているものが少なくない。

岡倉はまた、「ラヂオと外国語教授」(『放送』第5巻1号)でも「発音

本位に綴ったテキストの提示」をし、「学習者の語学困難を、純音声的のものとして、之に更に筆写上の困難をくわえないようにすることが大切で、それが為には、従来の単語単位の分書を避け、意味の単位を、語句の切り分けの標準とすべきである」と書いている。

筆者自身、英文を読む際に無意識のうちに音の流れが聞こえると文意が明確になるとの経験があることから、岡倉の主張に納得する。音声重視はラジオ講座開設の目的に直結するものであろうが、ここに書かれたことは、音声学の泰斗であった岡倉がいかにも音声・発音・朗読を重視していたか端的に示すものであろう。

なお、12年間も英語講座を担当してきた岡倉だったが、番組に対する取り組みは、つねにまじめで謙虚な姿勢を崩さなかった。「場なれて放送が気楽にできるという悟った落ちついた境地には今までついに入れずじまい」だった（「語学放送随感」）。筆者も、放送・同時通訳に従事してきたので、僭越ながら、ひとりで週3回30分を生放送で担当することがどれほど大変なことか容易に想像できる。また「随感」の締めくくりは「いつのまにやら十二年の歳月が流れて、元の木阿弥の今日のわたくし、おはづかしうございます」であった。

2.2.2. テキストの内容

1) 基本重視

英語講座の変遷とともにテキストの内容や構成に変化はあったが、主として初等科を担当した岡倉は基本的なスタイルを変えなかった。

以下は、講座が始まってから9年目(1934年/昭和9年)の基礎英語講座・春期(基礎英語講座は前年の春期から開講)のテキストの内容である。

- I. ペンの持ちかた
- II. A.B.C.
 - 1 頭文字(印刷体) 2 小文字(印刷体)
- III. A.B.C.
 - 1 頭文字(筆記体) 2 小文字(筆記体)
- IV. 運筆の順序
 - 1 頭文字の運筆 2 小文字の運筆

LESSON I

ABCの各自の名称

印刷体 筆記体 各文字の名称 (発音記号)

LESSON II

ABCの各文字の名称と 示す音 ローマ字

A, a [ei] [æ][ə][a:] (a)

LESSON III

ABCの合成記号

I ch(c+h) [si:eich] [ch]

例 bench (ベンチ) church (教会)

LESSON IV

英語の発声

I ひびき その一 ぼいん その二 びおん

II おと その一 きしむ音 その二 はれつの音

LESSON V

数 (一、二、三)

LESSON VI

I. One o'clock. It is one o'clock.

II. What time is it?

It is half past six.

It is a quarter past four.

Lesson VII

I. A day. A week. Seven days. Fifty-two weeks.

II. Sunday. Monday. Tuesday. Wednesday. Thursday.

Friday. Saturday.

Lesson IX

数 (第一、第二、第三) 1st first [fɜ:st]

100th hundredth [hʌndridθ]

LESSON X

Snow in January ; Ice in February; Wind in March;

Rain in April; Buds in May; Roses in June; Play in July;

Warm days in August; School in September;

Apples in October; Cold days in November;

Christmas in December

といった項目が並ぶ。現在の基礎英語につながる内容で、英語を一から教えたものだが、この後の展開が現代とは異なる。特に基礎英語になる前の英語講座初等科では、秋期になると内容が一気に高度になった。

2) 題材

岡倉はイギリスを始めヨーロッパに留学していたこともあり（ロンドンでは夏目漱石と交流があった）、題材はイギリス系の教養重視と言われている。山口誠が『英語講座の誕生』で論じているように、初年度の英語講座が終了してから1週間もたたないうちに（1926年/大正15年3月）、「英文学講座」が3週間にわたって毎日放送され、岡倉はじめ他の洋々塾の塾生が講師を務めた。英文は難解な「イギリス古典文学」で、英詩の作者であるラルフ・ホジソン（Ralph Hodgson 1871-1962）やエドモンド・ブランデン（Edmund Charles Blunden 1896-1974）の作品が引用されたという。山口は「大正末期の英語教育者たちは、“普遍の人間としての人格を兼ね備えた日本人”をその教育モデルとして設定し、そのもっとも有効な“教養”を、同時代でもっとも優勢であった大英帝国の“英文学”に求めた」と分析している。

ラジオ英語講座を半年受けたくらいでは、これらを読みこなすことはできないと思われるが、初等科の英語講座のテキストにもその予兆はある。具体的には、テキストの題材は、教訓的偉人伝、アラビアンナイトやイソップ寓話などで、随所にことわざや格言、詩などが取り上げられている。しかし、内容を見ていくとイギリス一辺倒というわけではない。扱われる地域もアジアなど多岐にわたり、「国際的」であった。

例を挙げよう。

①教訓的偉人伝

英語講座初等科・秋期（1931年/昭和6年）

Lesson IX

Little George Washington

I

You all know what a great man George Washington was. Perhaps you have seen pictures of him at the head of his army. But have you ever thought what kind of boy he was?

—略—

II

One spring day George's father went into the garden and wrote the name "George Washington" in the soft earth. Then he filled the letters with seeds. The warm spring rains made them grow. In a few days there was the name growing in fresh, green leaves.

Then Mr. Washington took George into the garden. The little boy ran around looking at the flowers and plants.

At last he saw his name growing there.

—略—

"I never saw plants grow by chance so as to make one letter. And here is my name. I think you must have done it, father. Did you not?" "Yes, my son," said Mr. Washington, "and I did it to teach you a lesson. Even a little thing like this does not come by chance. Then we may be sure chance did not make this beautiful world for us to live in." "There is water for you when you are thirsty, and food when you are hungry. There are plants and animals to give you clothing. There are beautiful sights for you to see, and sweets sounds for you to hear."

"The world is full of things for you to use and to enjoy. Some one has done all this for you. He is wiser and stronger than I. He loves you even more than I do. This is what I want you to learn and remember." "I will not forget it, father," said George, and he did not.

III

Mr. Washington dies when George was still a small boy. Then Mrs. Washington has to take care of the home and the farm.

She was very fond of horses and had a number of them. Among them was a fine young horse which no one had been able to ride or drive. One day George and some of his friends saw this horse in a field. "I know I can ride him," George said, "I am going to do it."

The other boys helped George to catch the horse and put the bridle on it. Then George sprang upon its back. The young animal kicked and plunged and tried in vain to throw its rider. At last it gave a great plunge and fell to the ground dead. The boys were very much frightened.

"O George, how angry your mother will be!" one of them said. "This is her

favorite horse. Do not tell her about it, and she will think that some of the men are to blame.”

—略—

George said, “Your favorite is dead, Madam. I killed him.” Then he told the whole story.

His mother did not speak for a minute. Then she said, “I am sorry that my favorite horse is dead, but I am glad that my son always speaks the truth.”

IV

There are these things you are to remember about Washington as a boy. He always told the truth, he was not afraid of anything, and he obeyed his father and mother.

If these things had not been true of him as a boy, he would never have grown up to be a great and good man.

少々長いですが、文法の難度と内容を示すため引用した。英語を学習し始めて6か月から9か月くらいの中学生が、下線部の仮定法過去完了（現在なら高校1年生くらいで学習）も含むテキストを学ぶのである。「英語教育番組略史」（『NHK 放送文化研究年報25』）によると、「英語講座の初等科は中学1年に相当する教材を扱い」、「当時の中学1年生は現在の新制中学の2年生が習うほぼすべての文法事項を学んだ」とあるが、ここに示された「新制中学2年生」は、2017年現在の中学2年生のことではない。この例からも分かるように、基本文法を早い段階で習得させ、一気に読解力を養うことを目指したと思われる。

また、題材はアメリカの初代大統領ジョージ・ワシントン（George Washington 1732～1799）の子供の頃の逸話である。日本人の多くは、ワシントンの正直さといえば、父親が大事にしていた桜の木を斧で切ってしまうが、正直に話したら、かえって褒められたという挿話（“George Washington’s axe” ワシントンの斧）を思い出すのではないか。これは『逸話で綴るワシントンの生涯（The Life of George Washington）』（メーソン・ロック・ウィームズ Mason Locke Weems 著）に出てくる逸話であるが、第5版（1806年）から加えられたこともあって、実話ではなく、子供向けの教訓的創作ではないとも言われている。真偽は定かではなく、岡倉が当時それを耳にしていたかどうか分からないが、岡倉が教訓談として選

んだものが、桜の逸話ではなく、上述の「母の愛馬を死なせたことを正直に告白するワシントン」だったことは興味深い。

偉人教訓談の系列では、他に1932年(昭和7年)英語講座初等科・秋期に、ワートルローの戦いで武勇を馳せたイギリスのウェリントン卿(Duke of Wellington 1769-1852)の例もある。

②イソップ寓話

英語講座初等科・春期(1930年/昭和5年)

Lesson XVI Fox and the Grapes

A fox ran along a dusty road. He was very warm and thirsty. Some grapes were on a vine in a garden nearby. They were large and ripe. How good they looked! "I wish I could get some," said the fox. He jumped high into the air. He did not get them. He tried again and again. Still he could not get them. At last he said: "What poor little grapes! I know they must be sour. I do not care for sour grapes."

*最後の一文の注解には「～なんかまっぴらだ」という見事な訳がついている。

この「キツネと葡萄」(別名「酸っぱいブドウ」)の寓話は、単語や表現の難易度が増して中等科のテキストにも登場する。

外国語夏期講座・英語講座中等科(1927年/昭和2年)

講師は岡倉のほか福原麟太郎、村岡博、寺西武夫、清水繁、武井享吉

THE FOX AND THE GRAPES

A hungry Fox stole one day into a vineyard where many bunches of Grapes hung ripe and ready for eating. But as luck would have it, they were fastened upon a tall trellis, just too high for Reynard to reach.

He jumped, and paused, and jumped again, in the attempt to get at them. But it was all in vain. At last he was fairly tired out, and thereupon, "Take them who will," he cried, "THE GRAPES ARE SOUR!"

同じ内容のものを、難易度を変えて提起するとは工夫された試みで、受講者にとっては学習の深化が感じられるのではないか。現在でも用いたくなるテキストである。

③詩

「英文学講座」で詩が取り上げられたことについてはすでに述べた（また英語講座中等科でも詩が多い）が、岡倉は初等科でも詩を取り上げた。例えば1932年（昭和7年）英語講座初等科・秋期に、『宝島』（Treasure Island）や『ジキル博士とハイド氏』（Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde）で名高いイギリス・スコットランドの作家ロバート・ルイス・ステューブソン（Robert Louis Balfour Stevenson 1850-1894）を、Lesson I My Shadow; Lesson V. Singing で取り上げている。岡倉は別にステューブソンの紹介や訳注を書いているからであろう。この時は、他に Tea Time（米国グレース・コル・ノルウェル Grace Noll Crowell 1877-1969）や Daybreak（米国ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー Henry Wadsworth Longfellow 1807-1882）、Grandpapa's Spectacles（米国エリザベス・シル Elizabeth Sill 19世紀）、Nature's Friend（英国 W. H. デイビーズ W. H. Davies 1877-1969）の作品も取り上げている。

さらに、1931年（昭和6年）英語講座初等科・秋期の Appendices（付記）でも、The Wind by Christina G. Rossetti（英国クリスティーナ・G. ロセッティ 1830-1894）、Nurse's Song by William Blake（英国ウィリアム・ブレイク 1757-1827）、See-Saw by Edward Shirley（エドワード・シャーリー）の詩を掲載している。

では、上記のグレース・コル・ノルウェルの Tea Time を紹介しよう。

When mother spreads the table
At evening time for tea,
It is the very nicest time
Of all the day to me.

I'm happy when the shadows
Grow long across the lawn;
Then mother folds her work away
And puts an apron on.
And goes out to the kitchen
(A lovely place to me),
And puts the kettle on the fire,

Then spreads the cloth for tea.

I like to watch her placing
Each cup and plate just so,
And see her lay the silver down
All in a shining row.

She bakes white, fluffy biscuits
And cuts the pink ham thin;
She tumbles jelly from a glass,
And brings it quivering in.
Oh, when the family gathers
At six o'clock for tea,
Home is the very nicest place
In all the world to me!

家族のお茶の時間の柔らかさ、静謐さ、小さな幸福感があふれる作品である。また午後6時にお茶を飲むというのは当時の習慣だったのか、異文化を伝えるものとなっている。なお作者はアメリカの詩人である。

④短い会話

同じ号のテキストでは、ちょっとした日常会話の例も掲載されていた。話すことにも目配りがあったことがうかがえる。

Do you speak English?
Yes, a little.
He speaks it pretty well.
I understand better than I speak.

最後のせりふは、「話すのは今ひとつですが、理解はまあまあできます」といったニュアンスを伝えていて、多くの人が共感できる、今まさに使える英語といえよう。

3. 聴取者/受講生

以上、岡倉英語講座の特徴を見てきた。では、これほどに高水準の英語講座を一体誰がどのくらい聴いたのだろうか。ここにテキストの販売部数を示す資料がある。これは岡倉が講座の担当を辞して間もない頃の数字であるが参考になろう。

1939年（昭和14年）

	発行部数	東京	合計	%	残品
基礎英語・春	50,000	26,930	43,701	87	6,229
実用英語会話・春	35,000	18,579	29,126	83	5,874
基礎英語・秋	35,000	15,607	24,758	70	10,242
基礎英語・冬	22,000	12,440	16,766	76	5,234

NHK 業務統計要覧(3) 昭和12-14年度

日本では、昭和14年当時、春になるとNHK英語講座を受講しようと思う人たちが全国で4-5万人いたということだ。

また、受講対象者に関する別のデータがある。1938年（昭和13年）実用英語会話・夏期⁴⁾では、日本の教育が会話のテーマになっていて、興味深い数字が出ていた。総務省統計局の数字ではないが参考にはなるだろう。約46,000校（そのうち小学校は26,000校）があり、小学校（義務教育）の就学率は高く、0.5%以下の子供が行かないだけである。小学生1,400万人のうち230万人（17%）が4種類のmiddle grade schools（中等教育機関）に進学。そのうち、男子中学校 Ordinary middle schools for boysは30万人。高等女学校 high schoolは40万人。実業学校（商船学校など）に通う男女は30万、business continuation school（実業補習校か）に通う男女は130万人となっている。

つまり、ラジオ英語講座の聴取対象者を230万人の中学生にかぎったとして、テキスト購入者が43,000人だとすると、全中学生のわずか0.018%しかテキストを購入していないことになる。テキストなしでも聴く人もいただろうが、やはり英語講座はごくごく一握りのエリート（の卵）しか聴かなかつたということになろうか。前述したNHKアーカイブスで岡倉の番組を試聴すると、お茶の間や船の上でラジオに聴き入る子供たちの姿が写っている。が、筆者は、実際の聴取者には、生の英語を聴く機会が極端

に少なかった英語の教師が含まれていたのではないかと推測している。

これを証明することはできないが、傍証になりうると思われる数字が見つかった。第一回全国ラジオ調査報告(1934年/昭和9年 通信省・NHK刊行)で、教養種目に対する聴取者アンケート調査を行なった結果、「語学・学芸は青年男女、殊に男子においてもっとも高い聴取率」を示しており、語学講座番組に対し要望をしてくる人の職業では、「教育に従事する者」が多かったとあるからだ⁵⁾。

受講者象がぼんやりと見える中で、講座の教育的成果を直接測りえないのは残念だが、戦前にもラジオ英語講座を聴いて英語を学んだ人たちがいたというのは、それ自体新鮮である。この事実に触れると、これまで明治以降の英語の達人たちの凄まじい勉強と天才ぶりを読み聞きするなかで、ラジオ講座に言及した話を聞いたことがないのは不思議なくらいだ。だが、ラジオ英語講座が、日本の英語教育に初期の頃から貢献したことは間違いないだろう。

4. 結論

以上、黎明期のラジオ英語講座について、初代講師の岡倉由三郎の教材に焦点を当てて考察した。岡倉講座の特徴は、1) 発音・音声・朗読重視、2) 基本重視、3) 題材は教訓的偉人伝、アラビアンナイトやイソップ寓話などが中心で、随所にことわざや格言、詩などで含まれ、「読むこと」も重視されていた。また、岡倉は、イギリス文学を教養の要に据えていると言われているが、テキストにはアメリカの作家や詩人も取り上げられていて、イギリス一辺倒というわけではなかった。

なお筆者個人としては、岡倉の生きた時代が明治から太平洋戦争前夜の激動の時代であることを思うと、テキストに政治・経済・社会など時代にかかわるものがないことは、若干物足りなく思えた。だが、これはあくまで初等科や基礎コースのことだ。今回の論考では取り上げないが、講座の発展とともに拡大・細分化されたコースでは、他の講師により時事性のある話題も取り上げられ、かつ外国人講師も投入されていた。

論を岡倉の特徴に戻すと、4) 学習ペースが速いことも挙げたい。繰り返すが、これほどに高水準の講座を設定したということは、受講対象の中学生に、これを理解していくだけの基礎力があると想定されていたことに

なる。実際の受講者はごく少数のエリート（の卵）であったかもしれないが、それにしても、この点は驚嘆せざるを得ない。

これらをまとめると、岡倉は、朗読による音声教育と読解を経て、聴解力を涵養することで、英語の総合力の強化に真正面から取り組んだ。教養を重視したのは、欧米のインテリ層に対応することを前提としていたからであろう。今日、英語の実用性を重視するあまり、「読解」が軽視され、それが英語力不足に至っていないだろうか。であればこそ、聴解力と読解力を重視した、岡倉に見える初期ラジオ英語講座の今日性を強調したいと思う。

最後に「英語と日本人」を考えるうえで、興味深い宣伝文を紹介しよう。テキスト分析をするなかで、目を引いた当時の英語学校の広告である。英語講座が始まって100年あまり。なるほど英語は大衆化したが、果たして進歩しているのだろうか。今に通じる宣伝文にお笑いあれ。

1)

1932 英語講座初等科・春期 裏表紙の広告

井上英語講義録

見よ!!

英語学習法は飛躍する!!

明確なる現代英語が、政界官界実業界の到所に要求せられる今日

片仮名のみで覚えた英語。笑物だ

斯界最高の執筆者にレコード併用の壮挙を加えた本講こそは、特に登竜門を目指す貴下に絶好の贈物

2)

1933 基礎英語・春期 裏表紙の広告

井上英語講義録

英語学習法は斯く飛躍した。

すぐその日から役立つ現代英語 (living English) は眼と耳とから覚えなければ無益!!

日本一の大学者の講義と英人吹込みのレコードさえあれば全くの初学者から読書会話の出来るまで僅か数ヶ月です!!

毎日2時間3か月で1年修了
15ヶ月目に中学卒業の実力
井上通信英語学校

3)

1938 実用英語会話・夏期 裏表紙の広告
井上英語講義録
最新の設備
会話まで上達
五輪大会万国博も決定、世界の眼は日本に集まる
今年からは英会話ができずに立身は絶対不可能
学歴は小学卒業でも、英語上達者は出世する
眼と耳からの講座で即刻自宅独習を始め給へ
本校へは年齢男女の別なく何方でもご入学が出来ます
井上通信英語学校(麴町)

注

- 1) 1925年(大正14年)に東京放送局、大阪放送局、名古屋放送局が次々と開局され、1926年(大正15年)に3局が合同して社団法人日本放送協会が発足した。さらに1959年(昭和25年)に、特殊法人日本放送協会に切り替えられた。1946年(昭和21年)3月から正式略称としてNHK(NIPPON HOSO KYOKAI)が使用される。
- 2) 春期、夏期、秋期、冬期の“期”はテキストによって“季”を用いているが、本稿では統一して“期”を使用。
- 3) 岡倉の著書は旧字体を使用しているが、本稿では新字体を使用。
- 4) Mr. H. V. Redman(府立高等学校講師)とMrs. Marjorie Nishiwakiが講師となって、日本について英語で会話しているところがある。日本は貧しく、資源がないなどということも語られていた。
- 5) この統計表は「職業別希望」(比例)を表わしたもので、「総数」の項目の中に「教育に従事する者 53.6」と出ている。単位は千分率の‰(パーミル)である。他の「陸海軍現役軍人の34.5」や「法務に従事する者の23.9」に比べ多い。

参考文献

- 宇佐美昇三 (1980) 「英語教育番組略史」『NHK 放送文化研究年報25』NHK 放送文化研究所
- 岡倉一雄 (2013) 「父 岡倉天心」岩波現代文庫
- 岡倉由三郎 (1932) 「ラヂオと外国語の教授」『調査時報』第2巻10号 pp. 30-33
- 岡倉由三郎 (1933) 「言葉の本質とラヂオの使命—「ラヂオと言語陶冶」への緒言」『調査時報』第3巻10号 pp. 2-3
- 岡倉由三郎 (1934) 「放送用語並発音改善調査 事務の開始とその仕事」『放送』(『調査時報』改題) 第4巻3号 pp. 2-5、p. 13
- 岡倉由三郎 (1935) 「ラヂオと外国語教授」『放送』第5巻1号 pp. 33-37
- 岡倉由三郎 (1935) 「放送用語に関する投書の考察」『放送』第5巻11号 pp. 38-41
- 岡倉由三郎 (1936) 「語学放送随感 放送十二年」『放送』第6巻9号 pp. 24-25
- 岡倉由三郎 (1937) 『英語教育』研究社
- 斎藤兆史 (2000) 『英語達人列伝』中公新書
- 平田論治 (2016) 「岡倉由三郎の「国際語としての英語」をめぐる思想と行動—1930年代初めのベーシック・イングリッシュの受容を中心にして—」『教育学研究』第83巻第3号 pp. 14-26
- 山口誠 (2001) 『英語講座の誕生』講談社選書メチエ
- 「業務統計要覧(1) 昭和5年度～8年度」(1930-1933年/昭和5-8年) 日本放送協会
- 「業務統計要覧(3) 昭和12年度～14年度」(1937-39年/昭和12-14年) 日本放送協会
- 「業務統計要覧(4) 昭和15年度～16年度」(1940-41年/昭和14-15年) 日本放送協会
- 「第一回全国ラヂオ調査報告」(1934年/昭和9年) 通信省・日本放送協会
- 英語講座のテキスト
- 岡倉由三郎他5人(講師)(1927年/昭和2年)「外国語夏期講座・英語講座中等科」日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎(講師)(1930年/昭和5年)「ラヂオ英語講座 春期 初等科」日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎(講師)(1930年/昭和5年)「ラヂオ英語講座 冬期 初等科」日本放送協会関東支部

- 岡倉由三郎 (講師) (1931年/昭和5年)「ラヂオ英語講座 春期 初等科」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1931年/昭和6年)「ラヂオ英語講座 秋期 初等科」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1931年/昭和6年)「ラヂオ英語講座 冬期 初等科」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1932年/昭和7年)「ラヂオ英語講座 春期 初等科」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1932年/昭和7年)「ラヂオ英語講座 秋期 初等科」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1933年/昭和8年)「ラヂオ英語講座 冬期 初等科」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1933年/昭和8年)「ラヂオテキスト 春期 基礎英語」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1934年/昭和9年)「ラヂオテキスト 春期 基礎英語」
日本放送協会関東支部
- 岡倉由三郎 (講師) (1934年/昭和9年)「ラヂオテキスト 秋期 基礎英語」
日本放送協会関東支部
- S. H. グリッグズ他5人 (講師) (1938年/昭和13年)「ラヂオテキスト実用英語会話 夏期」 日本放送協会関東支部

島岡丘 (2017)「岡倉由三郎先生 音声学と英語教育に道を開いた明治の草分け (1) 生い立ち」「(2) 英語教科書の編集主幹」「(3) 英文読解の楽しみと音読の楽しみ」「(4) 英語圏世界で日本文化を紹介する」「(最終回) ラヂオ放送所等英語講話」『ELEC 英語展望』

[http://www.nhk.or.jp/archives/digital/search/freeword/#keyword= 岡倉由三郎](http://www.nhk.or.jp/archives/digital/search/freeword/#keyword=岡倉由三郎)

http://www.elec.or.jp/teacher/communication/essay/print/yoshisaburo_2.html

http://www.elec.or.jp/teacher/communication/essay/print/yoshisaburo_3.html

http://www.elec.or.jp/teacher/communication/essay/print/yoshisaburo_4.html

http://www.elec.or.jp/teacher/communication/essay/print/yoshisaburo_5.html

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%BB%E3%83%AF%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%B3> ジョージ・ワシントン

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%88%B6%E5%BA%A6%E3%81%AE%E5%A4%89%E9%81%B7> 日本の学校制度の変遷

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%83%93>

教材から見るラジオ英語講座創始者の足跡

%E3%82%A2%E5%A4%9C%E8%A9%B1 新アラビア夜話

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%AB%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%B3> ロバート・ルイス・スティーブソン

Revisiting Japan's First Radio English Lessons and the Instructor

Hiroimi SODEKAWA

In 1925, the Japanese experienced their first radio English lessons, aired by Tokyo Broadcasting Station, which later became NHK. The on-air instructor was a prominent linguist, Yoshisaburo Okakura (1868–1936). The program kept evolving over the years, and was even on air the day of the Pearl Harbor Attack on December 8th, 1941.

After a four-year hiatus during WWII, the radio English lessons started up again, and are still on air to this day. It is often said that learning English in Japan mainly focuses on reading and writing rather than listening and speaking. However, the fact that radio English programs existed before WWII reveals a different story. This paper examines program texts by Okakura and analyzes particular features of his lessons, demonstrating what radio English programs actually looked and sounded like, and showing what they taught and might contribute to Japan's current English education. Okakura's lessons focused on 1) pronunciation and recitation exercises, 2) readings, including heroic tales, moral enhancing stories, Aesop's Fables, proverbs, poems, and the like; excerpts from British and American literary works and ideas from various Western intellectuals, 3) high level grammar lessons, and 4) demands for quick learning.

Against the present backdrop of globalization, English education in Japan has shifted its focus from reading and writing to listening and speaking. But is this focus really being successful? Considering the high level of English education during the early days of Okakura's radio programs, the author suggests that Okakura's teaching methods of readings, combined with accurate sound modeling, could form a basic model for contemporary English language learning.